

HSC (Highly Sensitive Children) 概念への社会学的接近

A Sociological Outlook of the Concept of HSC: Highly Sensitive Children

竹 中 祐 二

要旨

Highly Sensitive Children (HSC) 概念を主題とする本稿の目的は二つある。その一義的な目的は新しい概念であるHSCの紹介であるが、合わせて、そもそも社会学・社会病理学の考察対象となるのか、論理的な可能性を示すことを合わせて目的とした。その際、社会病理現象や生きづらさに関わって、かつて繰り返されたアダルト・チルドレンをめぐる議論、あるいは医療化論を参照しつつ、HSC概念が持つ有用性とその限界について検討すると共に、今後の議論に向けた可能性を示した。

キーワード： Highly Sensitive Children／医療化 (medicalization)／構築主義 (social constructionism)

I はじめに

近年、Highly Sensitive Person (以下HSP) 概念が、社会において受容され、そして定着しつつある。詳細については後述するが、HSPは、周囲の物理的な環境や雰囲気、他者の言動や感情に対して過剰に反応する特徴を有する人々を指す言葉として理解されている。そして、こうした特徴を持つ「子ども」に焦点化して語られる際には、Highly Sensitive Children (以下HSC) と呼ばれることがある。

HSPやHSCは新しい概念であるが、特に「不登校」との関わりで注目を集めつつある。日本で唯一の不登校専門紙である『不登校新聞』では、2017年にはじめてHSCの紹介が行われた¹⁾。このテーマについて、同紙ではその2年後から「わが家が目指したのはHSCの安全基地」と題する連載が開始された²⁾。また、教育に関する専門紙である「教育新聞」の中でも、HSCが不登校の原因として「最近注目されている」ことが指摘されている³⁾。不登校がこんにち「重大な社会問題としての地位を確立している」ことは十分に共有された認識であろう⁴⁾。そして、不登校という社会病理

現象について、より深く理解するために有効であるとする不登校の専門家による言及がなされている。したがって、社会学・社会病理学の立場からHSC概念に着目することには一定の意義が認められると考えられるだろう。

しかし、新しい概念であるからこそ、安易な導入とならないよう注意しなければならない。新しい概念であるHSCについては十分な先行研究が蓄積されているとは言えないが、特に社会学領域においては全く見当たらない。そのため、連続性を有する先行研究を欠くがゆえに、そもそもHSCが社会学・社会病理学の検討対象となり得るという論理的前提を示し得ない。社会学的先行研究がないのだから、本稿でHSCを取り扱うことそれ自体に新規性は確かに認められよう。この点で、本稿の一義的な目的は、社会学・社会病理学研究にHSCを「紹介」することにあることを確認しておく。もっとも、単なる紹介に留まっては学術的な論考とは言えない。本稿では、HSCへ社会学的接近を試みることで、概念の有用性に対する楽観的な賛美に終始することがないように、多角的な視点を提供することを合わせて試みる。なお、本稿ではHSPとHSCは概ね共通するものとして理解しつつ、HSCならではの固有の論点について踏み込んだ検討を行うことから、タイトルにおいてHSCを

TAKENAKA, Yuji

北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
社会病理学、児童福祉論、教育社会学

主眼に据えることとした。

II HSC・HSPをめぐる動向

HSPとは、1996年にアメリカの心理学者E. N. アーロン (Aron, E. N.) によって定義された「刺激に対する深い認知的処理や高い情動的反応を見せる特性を持つ者」^{5)・6)}を指す概念である。HSP概念は心理学、特に感情心理学の立場から、刺激に対する「反応」を見るという点について、その特徴的な反応についての研究が進められてきた。それら特徴的な反応は、以下に示す大きく4つに整理することができる⁷⁾とされている。

1つ目の特性として、「Depth；深く考える」が挙げられる⁷⁾。例えば、他人の家でイチゴをご馳走してもらうような場面で、多くの場合、人はそれを喜んで食べるだろう(すなわち、イチゴでなくても、一般的に人が喜んで受け取るような場面を想像していただきたい)。しかし、HSPはその前段階として、「どこで採れたイチゴか」、「高いイチゴではないか」、「何人で分けるのか」、「後から来る人の分を取り分けておかないといけないのではないか」、「今この場で食べられていない人はいないか」等のことを考えてしまい、そのため動作が遅い、遠慮がちであるといった評価を他者から受けることになる⁸⁾。

2つ目の特性として、「Overstimulation；過剰に刺激を受けやすい」が挙げられる⁹⁾。例えば、大きな音が苦手である、少しの暑さや寒さに不満を抱く、濡れた服や肌に触るチクチクする服が不満である、自分が楽しみにしている／していたはずのイベントなのにすぐ疲れてしまう、人に見られたり実力を試されたりする場面で普段の力を発揮することができないといった行動が見られ、「過剰に刺激を受けやすいため、すぐ刺激でいっぱいになってしまう」という特徴が指摘される¹⁰⁾。

3つ目の特性として、「Empathy & Emotional；共感力が高く、感情の反応が強い」が挙げられる¹¹⁾。現れ方の例として、物事の1つひとつを深く感じ取ろうとする、涙もろい、人の心を読むのに長けている、完璧主義なので些細な間違いにも強く反応してしまう、残酷な映画・ドラマが苦手である、不公平なことが許せない等がある¹²⁾。

最後の、4つ目の特性として、「Subtlety；些細な刺激を察知する」が挙げられる¹³⁾。例えば、人の髪形・服装の少しの違いにも気付く、家具等の配置の少しの違いにも気付く、あるはずのものがなくなったことにすぐ気付く、変わったにおいがするもの・場所には近付くのが苦手である、葉が効きやすい、少しの刺激でも頭・腹・足等が痛みと訴え、自分が何か悪い病気にかかっているのではないかとすぐ不安になる、といった例が挙げられ、そのため「常に頭をフル回転させている状態」であるから非常に疲れやすいといったことも指摘されている¹⁴⁾。

ところで、HSCであることと発達障害を有していることを混同されることは少なくない。アーロンがその概念を生み出すより前はHSPが発達障害であると疑われてきたし、そのような誤解は今なお少なくないと言われている¹⁵⁾、HSPと発達障害とは異なるものであるとして明確に区別されている¹⁶⁾。例えば、アスペルガー症候群(Asperger Syndrome)の子の場合、婉曲表現や皮肉を理解する、秘密を守る、顔色を読むといったことが不得手であるが、HSPは「Empathy & Emotional」という特性に見られるように、他者に対する共感力が高く、また人の心を読むのが得意であり、アスペルガー症候群の子が苦手な事柄に対してむしろ非常に敏感に反応すると言える¹⁷⁾。他にも、「気が散っている」ように見えることから注意欠陥・多動性障害(ADHD；Attention-Deficit Hyperactivity Disorder)と混同されそうになるが、HSPの場合には機能が欠如しているというよりも、人よりも働くが故に多くのことに気付き、そのことが「気が散ってしまう」ものとして周囲に理解されるのであり、そのため穏やかで自分がよく慣れているような環境であれば、適切な機能を適切に働かせることができる点で明確な違いがある¹⁸⁾。

ここからは、HSP・HSCに関する先行研究を概観する。先に述べた通り、HSC・HSP研究は心理学的研究を中心に進められてきており、その源流は1950年代から既にある「敏感な人」への研究に遡ることができる¹⁹⁾。HSPと発達障害が混同されてきたことは既述の通りだが、それは自閉症スペクトラム(ASD；Autism Spectrum Disorder)等の「発達障害児の多くに感覚の過敏

性が見られることは古くから知られてきたからである²⁰⁾。こういった外部刺激に対する感覚の特異性を有する「敏感な人」の特徴として、先行研究では「感覚的な刺激を受けやすい」、「恥づかしがり屋」、「内向的」、「怖がり」、「引っ込み思案」、「消極的」、「臆病」等の名前が付けられていた。アロン曰く、自分自身がHSPであるからこそ、これらの「ラベル」に当てはめられてしまうことの違和感を覚えていたことから²¹⁾、より適切・的確に言い表すことができるような概念の必要性を感じていたことが、HSP研究の端緒である²²⁾。

日本での研究動向について、論文検索エンジン「Cinii」を活用し、HSPおよびHSCとその正式名称、ならびに関連語としての「敏感性」の5語によって検索した結果をまとめたのが表-1である²³⁾。これを見ると、日本で本格的に研究が進んだのは2016年以降であり、2019年・2020年に出版が集中していることから、今まさに注目度は高まりつつあると言えるだろう²⁴⁾。しかし、これらほぼ全ての先行研究が心理学によるものであり、わずかに神経科学研究と教育学研究が数本程度見られるのみであって、社会(科)学研究は1つも無かった。このことも本稿の問題関心の基底にある事実である。

表-1 日本におけるHSP研究の動向

検索語	highly sensitive person	hsp	highly sensitive child	hsc	敏感性	
総抽出数	36	4,044	22	975	231	
関連研究	19	6	2	5	15	
出版年	2020	6	1	1	2	5
	2019	3	2	0	3	4
	2018	3	2	0	0	1
	2017	2	1	0	0	0
	2016	3	0	0	0	0
	2015	0	0	1	0	1
	2014	0	0	0	0	1
	2013	1	0	0	0	1
	2012	0	0	0	0	0
	2011	1	0	0	0	1
	2010	0	0	0	0	0
2009	0	0	0	0	1	
2005	0	1	0	0	0	

これらを踏まえて、日本における先行研究の動向は、内容的特徴から2つのことが指摘される。1つ目に、ある意味では心理学研究の特徴そのものとも言えるが、ほとんどがHSPの日本版の尺度を作成することを試みる実証研究だということが指摘される。代表例としては、「Highly Sensitive Person Scale日本版(HSPS-J19)の作成」というタイトルにも示されているように、高橋による

2016年の論文がその出発点となっている。高橋の研究は、アロンらの作成した尺度の邦訳版が無いことから、翻訳に対するバックトランスレーションを経た上で統計的検定を行うことで、適切な日本語版尺度を初めて作成した点に意義があると共に、高橋自身が同研究を、「これまで検討されてこなかった日本人の感覚感受性の高さを同定することが可能になる」点においても意義があると自ら評している²⁵⁾。2つ目には、特定の文脈においてHSP概念の有用性が語られている点である。具体的には、特に青年期において、他者関係での躓きや自らへの否定的評価を持つことへの理解にHSP概念を活用しようというものである。これには、アロン自身の問題意識が、HSP概念の「子ども期」への焦点化を促進させていることが大きく影響していると考えられる。アロンが抱えるHSPに関わる当事者性は、自分自身がHSPであるという側面に加えて、HSPの子を持つ親であるという側面も有している²⁶⁾。HSPである自分の育てられ方への思い、そしてHSPである自分の子の育て方に対する反省から、周囲の大人のその特性をよく理解した関わりが重要であると考え、HSCとして対象を焦点化したのである。HSCに特化したアロンの著書を後に翻訳することになる明橋は、「ストレスに苦しむ子」に対して従来とは異なる対応が必要であるという問題意識から、日本におけるHSP研究の嚆矢となる論文を2005年に執筆している²⁷⁾。

続いて、HSP・HSCに関する日本の出版動向を確認する。表-2は、本の総合カタログ「Books」出版書誌データベースを用いて、HSPおよびHSCとその正式名称、ならびに関連語によって検索した結果をまとめたものである²⁸⁾。検索語は表頭に示した通りであるが、表-1と異なり、関連語は「敏感な人」・「敏感な子」に変えている。この結

表-2 日本におけるHSP関連の出版動向

検索語	highly sensitive person	hsp	highly sensitive child	hsc	敏感な人	敏感な子
総抽出数	22	69	0	16	22	7
関連研究	15	37	0	8	11	6
出版年	2020	8	6	0	5	2
	2019	3	18	0	2	1
	2018	1	5	0	0	1
	2017	1	5	0	1	1
	2016	2	2	0	0	2
	2015	0	1	0	0	0
	2014	0	0	0	0	1
	2005	0	0	0	0	1

果を見ても、出版状況は2018年以降に集中していることがよく分かる。

不登校支援との関わりで2005年に出版されたものを除き、2015年に出版された2冊が実質的には出発点となっており²⁹⁾、その内の1つであるアローンの著書を翻訳した明橋と、もう1つの著者である長沼は、それぞれHSP・HSC問題における日本の第一人者として位置付けられている。NHK Eテレ(NHK教育テレビジョン)で2012年から放送されている「バリバラ」という情報バラエティ番組の中で、2019年8月29日放送回においてHSCが特集テーマとして扱われた。同番組内で長沼は、出演をした当事者の主治医として登場しているが、誠文堂新光社が運営するWebサイト「よみものどっとこむ」内での連載「子どもの敏感さに困ったら」の初回記事において、自身の2016年の著書をきっかけとして「実際に敏感さに悩む方々が全国各地から問い合わせをされてきたり、遠路はるばるやってこられたりするケースが増えた」と述べている³⁰⁾。

同記事内で長沼はさらに、「過剰な敏感さに困っている人が、やはりこんなにいるんだと実感する一方、私は『これは大人だけでなく、子どものHSPのことももっと知ってもらう必要があるなあ』という思いを強くしました」とも述べていることから³¹⁾、HSCよりも先にHSPの問題として日本社会へ浸透していったことが読み取れる。実際に、HSCのように対象を焦点化した出版物よりも、広くHSPを対象とした出版物の方が約6倍とかなり多くなっている。

1989年に子どもの権利条約が採択されて以降、子どもを権利の「主体」として位置付ける潮流は世界的なものとなっているが、「子どもの人権・権利保障の歴史の中では」、「成長発達を社会的に保護される人権・権利」である「受動的権利」について早い段階からその必要性が認められてきたし、「たとえ子どもといえども、独立した人格の主体とみるというのが、子ども家庭福祉の大前提である」一方で、「心身の発達状況によっては、十分に独立したとはいいがたい状況にある」ことも合わせて大前提として理解されるものである³²⁾。それゆえ、先行研究においては青年期の生きづらさや子どもへの支援について言及されてきたので

あるし、HSCに対する子育てに関する啓蒙書が見られるのだろう。

検索結果の中から、大人の読者を想定した書籍のタイトルを見ると、『繊細さんが「自分のまま」で生きる本』、『HSP! 自分のトリセツ 共感しすぎて日が暮れて』、『敏感すぎるあなたがうまく話せる本』、『ささいなことに動揺してしまう敏感すぎる人の「仕事の不安」がなくなる本』等、自分自身の存在を肯定的に受け入れること、また今よりも自分を高めることを目指したメッセージが記されたものが多く見られる。こうした書籍群は一般的に「自己啓発書」と言われるが、牧野が著書の中で「自己啓発書ベストセラーの戦後史」の系譜を辿っているように³³⁾、こうした風潮は決して目新しいものではない。加えて、近年の自己責任論や個人主義化、また私事化とも相まって、HSC・HSPをめぐる動向においても、問題を個人化して理解する流れの延長線上にあるものと考えられるだろう。

本節では最後に、新聞記事から見るHSP概念の受容の動向を確認する。結論を先取りすると、全国紙の新聞紙面上でHSPについて取り上げられることは極めてまれだというのが現状である。「hsp」、「highly sensitive person」、「hsc」、「sensitive person child」、「敏感な人」、「敏感な子」のそれぞれを検索語として、朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱ」を用いて検索を行ったところ³⁴⁾、重複を除き、2020年12月31日まででヒットしたのはわずかに2件のみであった³⁵⁾。

1つ目の記事は、2017年8月2日朝刊・千葉全県・地方版・22面の「(人ひとヒト) フリースクール主宰・杉本景子さん/千葉県」という記事である。その内容を紹介する(以下、本段落におけるカギカッコ内は紙面からの引用)。杉本さんは「精神科病院の看護師だった経験があり、不登校などの相談を受けることも多かった」ため、フリースクール「ペガサス」を立ち上げたが、「主に発達障害や精神疾患が学校生活をめぐる問題の原因だとする風潮には違和感があった」とのことである。そのときに「HSC」を知り、「納得感を得られ」、「周囲の理解が進めば快適な学校生活を送れる」と考える杉本さんは、「著書や講演活動を通じ、HSCへの理解を進めたい」と考えてい

る、とのことである。

2つ目の記事は、2020年11月5日朝刊・千葉全県・地方版・24面の『人一倍敏感な子』に理解を『HSC』、教育現場で考慮されず／千葉県』という記事である。その内容を紹介する（以下、本段落におけるカギカッコ内は紙面からの引用）。この記事でも先の杉本さんのコメントによってHSC概念が紹介されている。それに続いて、「赤ちゃんの頃から手がかかり、『なぜだろう』とずっと悩んできた」と語る母親の声が紹介されている。子どもに対する違和感や不安について、健診では「大丈夫だから」と片付けられ、他の母親からは「過保護ではないか」と指摘され、自らの育児に対する苦しみを抱えてきたとのことであった。ところが、最近になってHSCを知り、「ずっと抱えていたプレッシャーから解放された」だけではなく、今では子の特性として、むしろ長所として伸ばしていきたいとまで思えるようになったとのことである。そして最後に、「HSCについて理解が広まれば、良い特性にも目が向くと思う。そのためにも相談体制を充実させてほしい」という語りで締め括られている。

Ⅲ HSC概念の有用性と妥当性をめぐる検討

前節では、HSC概念をめぐる研究動向や出版動向、新聞での取り上げられ方について確認してきた。その内容を概括すると、以下の様に整理することができる。

外部環境やそこからの刺激に対する反応の仕方に特徴を有するHSPについては、主として心理学的視点から研究が進められてきた。特に、発達障害との異同が論点となってきたこと、提唱者自身の問題意識と相まって、それは子ども・青年期における重要な問題として位置付けられることが多く、HSCとしても概念化していった。こうした学術的動向とは異なり、日本社会では特に生きづらさを抱える大人の問題として受容されていった。

また、HSC・HSPは決して障害ではなく、また特別・特殊な何かでは決してない、「普通」の人と何も変わらないという主張が多く見られた。一方で、「普通」であると認めることだけでは、自己存在の肯定には貢献するものの、現に抱えている生きづらさや困り事の解消には役立たない。そ

れゆえ、HSC・HSPという概念を持ち出すことで、そしてその特性をよく理解することで、周囲ではなく自らがその振る舞いを変えることが生きづらさに繋がるのだという、自己存在の肯定とは真逆のメッセージへと反転することも確認された。

新聞紙面でHSPやHSCが取り扱われることは極めて少なく、その限られた例においては、いずれもHSC概念が、何者でも無かった存在を言い当てる何かとして機能することで生きづらさを解消すること、そして当事者との繋がりを推し進めていることが紹介されていた。この点について、心理学的研究（における尺度化）が基盤にあるとは言え、特定の文脈における生きづらさを解釈するものとして、その科学性・客観性に基づく妥当性がよりいっそう安心感をもたらすフレームとして機能したものと考えられる。

なお、本稿における先行研究を含めたデータのほとんどはこの4～5年以内のものに集中しており、HSP・HSCが今まさに日本社会に受容されつつあることも確認された。一方で、先行研究やデータの絶対数が少ないことは否定できない。そのため、本稿の見解を一般化することの限界を自覚しなければならないものの、絶対数が少ないにも拘らず特定の文脈へ偏っているからこそ読み取れるものもあるだろう。本節では、ここまでの確認作業を踏まえて現代社会の特徴について考察することを通して、HSC概念の有用性や妥当性を検討していく。

先に述べた通り、HSPは自己啓発ブームの延長線上にあるが、他者関係のつまずきとの関わりにおいても取り上げられることが多かった。それは、不登校に象徴される問題や、書籍やインターネットメディアの主題、新聞記事に見られる当事者の語りからも確認される。このことから、「他者との適切な関係を構築すること」を求める現代社会において、そのつまずきを説明する理由として、HSCが理解されつつあるのではないだろうか。特に若者の生きづらさやアイデンティティ管理においては、他者とのコミュニケーションのあり方を問い直すという処方箋が提示されている^{36)・37)}。また、20世紀半ばにリースマン (Reissman, D.) が指摘した「他者指向」は、今日「電子コミュニ

ケーションの技術ならびにSNSの発展によって「いっそう激越化してしまっている」ことが指摘されている³⁸⁾。

他方、HSCは「普通であること」が強調・尊重されておき、他者のまなざしを気にすることのない、ありのままの自分でいることが称揚されている。このことから、他者指向の強化ゆえにHSCが受容されつつある一方、その行き過ぎた状況に対する揺り戻しの兆しとしても、HSCの受容は位置付けられるのではないだろうか。高原は、不登校を初めとする今日の社会病理現象は日常性の病理と私事化の問題によって説明できると述べている³⁹⁾。今日見られる諸現象は社会のマクロ構造によっては説明し得ず、「関係性」の病理と表現されるのである⁴⁰⁾。こうしたミクロ・メゾの問題は、個人主義化の一形態である「私事化；privatization」による影響をもたらす中で、「潜在的な被害やリスクの可能性に対して、いかに連携して新たな共同性を再構築できるかが、今問われている」ことを、森田は指摘する⁴¹⁾。HSP概念のHSCへの収斂は、子育てにおける「訳の分からなさ」を支え合う共同体の縮小に起因するものと考えられる。それゆえ個人的かつ科学的な理解をもたらすHSC概念が個別の子育てに対する悩みや不安を軽減する方向に働いたのだろう。そして、新たな概念定立による理解の共有、そしてHSCが「普通」のことであるというメッセージが、親密圏や共同体の再構築への期待感を高めることが推測される。

私事化の進行は関係性の希薄化をもたらすが、裏を返せば他者との「関係性」がもたらす社会病理への影響力が大きくなっているとも言える。しかし、2011年の震災以降、「コミュニティにたいする過剰な期待や願望がコミュニティの実態から乖離したところで一方的にふくらむ」という、「コミュニティ・インフレーション」の状態が指摘されている⁴²⁾点にも注意が必要である。2000年代初頭から指摘されてきた自己－他者関係の保ち方は、未曾有の大災害を経てさらに歪なバランスとなってしまった。いっそう錯綜した状況の中で、中森の研究は、また新たな気付きをもたらしている。中森は、ある意味伝統的な、一方では研究の遡上に何故かあげられることのほとんどな

かった「失踪」という社会病理現象についての研究を通して、「親密な関係」から離脱することを否定する、言わば「普遍的な倫理」を前提としつつも、それに対する「過剰な責任」から個人を解放する契機を見出している⁴³⁾。

HSP・HSCとは、「個人」の特性について見るものであるが、その特性ゆえに社会集団のあり方に対して敏感となり、準拠集団における自らのあり方、そして個々の他者との関係構築のあり方について過敏に反応してしまう。結果としてそのあり方を自己規定できず、不登校やひきこもりといった社会病理現象として顕在化させてしまう場合があるが、「概念」という「ラベル」は、「当事者団体」という、自分の存在を、自分「達」という「新たなつながり」をもたらず契機ともなっていくのではないだろうか。確かにHSP・HSC概念は極めて新しく、特に社会学領域では全く知見が積み重ねられてはいない。しかし、自己のあり方と他者関係のあり方の歪な不均衡状態が、現代社会においてもなお見られることを明らかにするものであり、同時にそれを氷解させる可能性を秘めているものと言えるのではないだろうか。

しかしながら、HSC・HSPの有用性は、概念それ自体が抱える「危うさ」を踏まえた上で受け止めなければならない。アロンは、実証的な検討を通して、先行研究における類似の概念とHSPとは明確に異なるものだと示している^{44)・45)}。しかし、アメリカ精神医学会；American Psychiatric Associationの作成するDSM-5；Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-5（「精神疾患の診断・統計マニュアル」）には、HSP/HSCの判断基準は記載されていない。医学的カテゴリーの問題とは見なされていないということは、（精神）医学それ自体が確定診断なるものを出しにくいとは言え、例えばHSPに該当するか否かについての専門家による客観的な判断が存在しないということである。学術論文以外にも、書籍や各種インターネットメディア、またアロン自身のWebサイトにも、HSP尺度である23のチェックポイントが示されてはいる。確かに、心理学的・統計学的妥当性に裏打ちされているとは言え、自らがHSPであるか否かは、「自称」でしかないのが現状である。何をもちてHSPとするのかという基準

の緩やかさは、多くの、また幅広い当事者を支えるという順機能を持ちつつも、一種のプラセボにしか過ぎない危険性という逆機能にも繋がりがねない。

この状況は、「生きづらさ」に関わる理解枠組みとしての、「アダルト・チルドレン」(Adult Children、以下AC)をめぐるかつての議論を想起させる。ACとは、「元来、アメリカのアルコール依存症の臨床のなかから産まれた」、「アルコール依存症の問題を抱えた家族のなかで成長した大人」を意味する概念である⁴⁶⁾。信田は、ACを「現場で働くコ・メディカルの人たちが、ひとくくりにして名付ける必要を感じて生まれたことば」であり、「実体的というより機能的であり、客観的というより主観的である」ことから、「水増しされて拡大する時に起こりがちな『安易なレッテル』になるのを防ぎ、診断用語として医療の場に組み込まれるのを防ぐ」ことの重要性を指摘している⁴⁷⁾。また、柴田は、ACや共依存といった概念に統一された単一の定義が無いことによって、アメリカと日本双方での、研究・臨床のそれぞれにおける錯綜状況を指摘している⁴⁸⁾。結果として、2000年代以降、ACに対する期待や盛り上がりは収束していった。ACと異なり、HSC・HSPはその判断基準において客観的・統計学的妥当性を持つものの、判断を行う主体によって判断基準に揺れが生じる危険性がある。HSCへの安易な礼賛が危険であることは、ACをめぐる議論から容易に推測されるだろう。

このことに加えて、HSCをめぐる知見の積み重ねが少ないこととも相まって、HSCを所与のものとして見ることで自らの限界が指摘される。これまでに名前を持たなかった、何物でもなかった「HSC」なるものが「ある」ということを描き出す過程は、社会構築主義における、「客観的に存在する何らかの状態ではなく、問題を定義するクレーム申し立ての活動」に他ならない^{49)・50)}。そして、データの少なさ、さらには概念そのものの内包する揺らぎは、本稿における「客観的な状態と、そうでない状態の恣意的な線引き」である「オントロジカル・ゲリマンダリング (OG)」による批判の可能性という限界として自覚しておかねばならない。

ACとHSCの共通性は他にも「医療化」(medicalization)の切り口から確認できるが、医療化とは、「非医療的問題が通常は病気あるいは障害という観点から医療問題として定義され処理されるようになる過程」として説明されるものである⁵¹⁾。ところで、不登校の原因の一つに発達障害があることは早くから指摘されているが⁵²⁾、社会病理学の中でも医療化の切り口から両者について言及することは既になされている⁵³⁾。確かに、HSCと発達障害には類似性や近接性が認められるものの、両者は全く異なるものであることは既述の通りである。工藤は、発達障害という概念が不登校に思い悩む当事者の免責に資する可能性がある⁵⁴⁾。工藤は同時に、この恩恵を受けることを「『うまく』行える人は、『医療』との関わりを模索する人の一部である可能性を指摘する⁵⁵⁾。これと関わって斎藤環は、「精神医学は、不登校問題にかかわるさいに」、「事例数が少ない段階で医療化を推し進めたこと」などから、「少なからぬ数」の人々が「強制的な入院治療を受けさせられた」といった「大きな過ちをおかしてきた」ことを指摘している⁵⁶⁾。一方で、それがジレンマを引き起こす逆機能を生じさせつつも、ひきこもりへの支援を推進するにあたって「病名をつけないと行政が相手にしてくれない」という点は決して見逃せない⁵⁷⁾。HSC概念は新規のものであるからこそ、「相談窓口」を求め、「名付け」を求め、「免罪符」を求める動きが高まりつつあるからである。だとすると、単なる「言葉遊び」に留まらないように、ACの「いつか来た道」とならぬように、HSC概念がいかに関心され、いかに位置付けられていくべきかは、今後も慎重に検討されねばならない。

本稿では最後に、新たな展開をもたらす得る視点を紹介し、まとめに代えることとしたい。それは「批判的实在論」という立場をとることである。いまだ明確に確認されていない、また経験的に確認され得ない事象をめぐるメカニズムを解明することが、HSC研究をめぐる問題として指摘されるが、批判的实在論の立場は言わば、「『ある』のか『ない』のかわからない物事に対して『ある』ことを前提にメカニズムを解明しようとする」ものである⁵⁸⁾。もっとも、社会構築主義の文

脈におけるOG問題を待たずとも、社会病理学者が研究対象を措定すること自体に規範的な問題提起が内在していることも自覚しておかねばならない^{59)・60)}。しかし、真に科学的妥当性をもってメカニズムを解明することができるならば、規範的な問題性を回避しつつ、実態的な社会病理現象の解消にも貢献できるのではないだろうか。

〈文献〉

- 明橋大二 2005 『ストレスを感じやすい子——HSPという概念を中心に』金子書房編『児童心理』第59巻11号：57-60.
- 明橋大二 2018 『HSCの子育てハッピーアドバイス』1万年堂出版.
- 明橋大二(監)・太田知子 2018 『HSC子育てあるあるうちの子はひといちばい敏感な子!』1万年堂出版.
- Aron, E. N. 2002 *The Highly Sensitive Child*, Harmony (明橋大二(訳) 2015 『ひといちばい敏感な子』1万年堂出版).
- Aron, E. N. & Aron, A. 1997 “Sensory-Processing Sensitivity and Its Relation to Introversion and Emotionality”, *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.73 No.2 : 345-368.
- Aron, E. N., Aron, A., & Jagiellowicz, J. 2012 “Sensory processing sensitivity: A review in the light of the evolution of biological responsivity”, *Personality and Social Psychology Review*, 16 : 262-282.
- 朝日新聞社 2000 「森透助教授 不登校問題 子どもの気持ち大切(まちかど通信)／福井」『朝日新聞』2000年9月18日朝刊・福井版29面.
- 朝日新聞社 2017 「(人ひとと) フリースクール主宰・杉本景子さん／千葉県」『朝日新聞』2017年8月2日朝刊・千葉全県・地方面・22面.
- 朝日新聞社 2020 「『人一倍敏感な子』に理解を『HSC』、教育現場で考慮されず／千葉県」『朝日新聞』2020年11月5日朝刊・千葉全県・地方面・24面.
- Conrad, P. & Schneider, J.W. 1992 *Deviance and Medicalization*, Mosby (進藤雄三(監訳) 2003 『逸脱と医療化』ミネルヴァ書房)
- 土井隆義 2009 『キャラ化する／される子どもたち 排除型社会における新たな人間像』岩波ブックレット No.759.
- 不登校新聞社 2017 「不登校ではなく、じつは『ひといちばい敏感な子(HSC)』?」『不登校新聞(Web版)』469号 (<https://futoko.publishers.fm/article/16605/>・2020年6月7日確認).
- 不登校新聞社 2019 「わが家が目指したのはHSCの安心基地 ひといちばい敏感な子とその親が始めた安心基地の作り方」『不登校新聞(Web版)』509号 (<https://futoko.publishers.fm/article/20590/>・2020年6月7日確認).
- 井上善之・窪島務 2008 「発達障害に背景をもつ学校不適応に関する研究—不登校についての文献的検討—」滋賀大学教育学部編『滋賀大学教育学部紀要 教育科学』No.58 : 53-61.
- 石川洋明 2004 「不登校」高原正興・矢島正見・森田洋司・井出裕久(編)『病める関係性——ミクロ社会の病理——』学文社 : 33-47.
- 菅野仁 2008 『友だち幻想 人と人の〈つながり〉を考える』ちくまプリマー新書.
- 教育新聞社 2019 「不登校対策 『人一倍敏感な子供』への理解を」『教育新聞』Webサイト (<https://www.kyobun.co.jp/commentary/c20190418/>・2020年6月7日確認).
- 工藤宏司 2004 「不登校」高原正興・矢島正見・森田洋司・井出裕久(編)『病める関係性——ミクロ社会の病理——』学文社 : 49-64.
- 工藤宏司 2006 「不登校と医療化」森田洋司・進藤雄三(編著)『医療化のポリティクス——近代医療の地平を問う』学文社 : 165-179.
- 串崎真志 2018, 「高い感性をもつ子ども(Highly Sensitive Child)の理解: 自閉症・高敏感者・エンパス・不登校」関西大学人権問題研究室編『関西大学人権問題研究室紀要』76 : 27-55.
- 牧野智和 2012 『自己啓発の時代: 「自己」の文化社会学的探究』勁草書房.
- 森田洋司 2004 「病める関係性の時代」高原正興・矢島正見・森田洋司・井出裕久(編)『病める関係性——ミクロ社会の病理——』学文社 : 1-14.
- 長沼睦雄 2017 「【HSCの本】〈敏感で繊細な子〉との向き合い方」『子どもの敏感さに困ったら』誠文堂新光社Webサイト「よみものどっとこむ」(https://43mono.com/series/kodomono_binkansani/komattara_vol01/) (2020年3月31日確認).
- 中久郎 1986 「社会学理論のなかの『病理』理論」『現代の社会病理』1 : 25-45.

- 中森弘樹 2017 『失踪の社会学 親密性と責任をめぐる試論』慶應義塾大学出版会.
- 中森弘樹 2019 「社会病理学は社会問題の構築主義を受容したのか」朝田佳尚・田中智仁(編著)日本社会病理学会(監)『社会病理学の足跡と再構成』学文社:191-215.
- 信田さよ子 1997 「アダルト・チルドレン—私の物語をつくり直す—」日本家政学会編『日本家政学会誌』Vol.48 No.9:823-828.
- 西日本新聞社 2019 「環境に敏感な子知って 5人に1人 不登校の遠因にも」『西日本新聞』2019年6月2日朝刊1面.
- 斎藤学 1996 『アダルト・チルドレンと家族』学陽書房.
- 斎藤環 2006 「ひきこもりと『医療化』」森田洋司・進藤雄三(編著)『医療化のポリティクス—近代医療の地平を問う』学文社:129-147.
- 進藤雄三 2006 「医療化のポリティクス—『責任』と『主体化』をめぐる」森田洋司・進藤雄三(編著)『医療化のポリティクス—近代医療の地平を問う』学文社:29-46.
- 柴田啓文 1998 「アダルト・チルドレンをめぐる諸概念の検討」『四日市大学論集』第11巻第1号:137-149.
- Spector, M.B. & Kitsuse, J.I. 1977 Constructing Social Problems, Cummings Publishing Company (村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太(訳)1990『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて』マルジュ社).
- 高原正興 2016 「現代の社会病理の見方」日本社会病理学会(監)高原正興・矢島正見(編著)『関係性の社会病理』学文社:1-13.
- 高橋亜希 2016 「Highly Sensitive Person Scale日本版(HSPS-J19)の作成」日本感情心理学会編『感情心理学研究』23巻2号:68-77.
- 竹中祐二 2019 「批判的实在論の可能性」朝田佳尚・田中智仁(編著)日本社会病理学会(監)『社会病理学の足跡と再構成』学文社:217-241.
- 竹中祐二 2020 「HSC (Highly Sensitive Children) へのスクールソーシャルワークを通じた対応の有用性」北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部編『教職課程研究』第7号:27-32.
- 山田真茂留 2019 「友人とは誰のことか?」友枝敏雄・山田真茂留・平野孝典(編著)『社会学で描く現代社会のスケッチ』みらい:8-14.
- 山縣文治 2018 『子ども家庭福祉論』ミネルヴァ書房.
- 吉原直樹 2013 「ポスト3・11の地層から」伊豫谷登士翁・斎藤純一・吉原直樹『コミュニティを再考する』平凡社新書:89-124.

〈注〉

- 1)不登校新聞社, 2017.
- 2)不登校新聞社, 2019.
- 3)教育新聞社, 2019.
- 4)石川, 2004:3.
- 5)Aron, Aron & Jagiellowicz, 2012.
- 6)串崎, 2018.
- 7)明橋・太田, 2018:69-71.
- 8)同上:69-70.
- 9)同上:72-73.
- 10)同上:72-73.
- 11)同上:74-75.
- 12)同上:74-75.
- 13)同上:76-77.
- 14)同上:74-75.
- 15)竹中, 2020:28-29.
- 16)アーロンはこの他に、発達障害当事者とHSPの脳内の血流が明確に異なっていることも、HSPが発達障害とは明確に異なる理由であることも述べている [Aron, 2002=2015:64.].
- 17)同上:66-67.
- 18)同上:64-65.
- 19)同上:24.
- 20)高橋, 2016:68.
- 21)敏感な者が必ず内向的ではないことの根拠として、HSPの中にはHSS(刺激を求めるタイプ; High Sensation Seeking)である者もあり、HSPとHSSの2つの概念を用いて、4つのタイプに分けることができるとされている [明橋, 2018:18-19.].
- 22)前掲注16):24-25.
- 23)検索作業は2021年9月27日に行った。なお、表記の揺れを防ぐため、HSCについては「children」ではなく「child」として広く検索作業を行っている。この作業は、書籍検索と新聞記事検索でも同様である。また、検索結果は一部重複している。
- 24)1年単位の結果を確認するため2020年までの検索結果をまとめているが、例えば「highly sensitive children」を検索語としたとき、2021年のものとして既に7本の

- 論稿が抽出されている。
- 25)前掲注20)：69-70.
- 26)前掲注16)：24. なお本稿では、HSP当事者間のコミュニケーションという問題については立ち入らないこととする。
- 27)当該論文が掲載されている雑誌『児童心理』第59巻11号は、「ストレスに苦しむ子」という特集テーマとなっている [明橋, 2005]。
- 28)検索作業は2021年9月27日に実施した。抽出された出版物の中から、本稿が主題とするHSPとは明らかに関係のないものを除外している。
- 29)長沼は、記事内において明橋による訳書が日本におけるHSP概念受容に対する大きな影響力を与えたことに言及している。また、西日本新聞が2019年6月2日に掲載した記事内では、HSCに関するアメリカの心理学者の著書が2015年に翻訳されたことから、「国内でも広まるようになった」と指摘されている。
- 西日本新聞公式Webサイト「環境に敏感な子知って5人に1人 不登校の遠因にも」(西日本新聞2019年6月2日号1面掲載記事) (<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/515115/>) (2019年11月19日確認)
- 30)長沼, 2017.
- 31)同上
- 32)山縣, 2018：31.
- 33)牧野, 2012.
- 34)検索作業は2021年9月27日に行った。
- 35)「敏感な子」の検索結果において、具体的にHSPやHSCについての言及は無いが、不登校支援の文脈で「敏感な子」について言及がなされていた。このことは、明橋らが臨床現場の中で違和感を抱いたことも符合すると言えるだろう。例として以下の記事がある。
- 朝日新聞社 2000 「森透助教授 不登校問題 子どもの気持ち大切 (まちかど通信)／福井」『朝日新聞』2000年9月18日朝刊・福井版29面.
- 36)土井, 2009.
- 37)菅野, 2008.
- 38)山田, 2019：12.
- 39)高原, 2016.
- 40)同上
- 41)森田, 2004：13.
- 42)吉原, 2013：90.
- 43)中森, 2017.
- 44)Aron & Aron, 1997.
- 45)前掲注20).
- 46)斎藤学, 1996：5.
- 47)信田, 1997：823.
- 48)柴田, 1998.
- 49)Spector,M.B. & Kitsuse,J.I., 1977=1990.
- 50)中森, 2019.
- 51)Conrad & Schneider, 1992=2003：1.
- 52)井上・窪島, 2008：53.
- 53)工藤, 2006.
- 54)同上
- 55)同上：176.
- 56)斎藤環, 2006：136.
- 57)工藤, 2004：62.
- 58)竹中, 2019：231.
- 59)中, 1986.
- 60)前掲注58)